



2016年3月に品川区が発行した『品川区都市型観光プラン』

顕彰事業所と都市型観光

—しながわならではの都市型観光の鍵に—

区は平成28年3月、「繰り返し訪れて楽しいまち しながわ ～日常の生活環境に着目した官民連携による都市型観光の推進～」というコンセプトを掲げた「品川区都市型観光プラン」を策定しました。同プランではこの地域の暮らしや生活文化に根ざした資源をとおして来訪者が区民と交流することを意図し、「くり返し訪れて楽しめる」観光都市を目指すものです。

区内には単体で強い集客力をもつ観光資源はありません。しかし、まちを歩けば、幕末～明治の歴史を感じられるスポットや自然豊かな水辺・公園、個性的な商店街など、しながわならではの多様な観光資源が点在しています。地域の歴史や生活の営みに根ざしたこのような資源は、見せ方や伝え方の工夫次第で来訪者を魅了することができます。この点で、しながわのまちは、まちを歩きながら、まちの歴史や生活、まち自体を楽しむ、都市型観光に適しているといえます。

本冊子で取り上げる顕彰事業所のうち、21所が小売店ないし飲食店です。商店街に軒を連ねているところも多く、上記のような都市型観光において重要な役割が期待されます。それら



顕彰事業所が建ち並ぶ旧東海道を舞台に催される「しながわ宿場まつり」
(出典：しながわ百景 品川地区101)

の事業所のほとんどは幕末～明治期の創業であり、取り扱う商品はこの地域の歴史と関連するものが多いことから、しながわへの関心を深めるきっかけとなりえます。

例えば、海苔です。かつて品川が海苔の名産地であったことは、古くからの住民にとっては「当たり前」のことでも、広く周知されているわけではありません。海苔店を訪れたことをきっかけに、浮世絵にも描かれた品川沖の豊かな海のことを知り、品川浦の水辺空間などへ足を向けるといったまち歩きも想定できます。また、対面式の商店は客との対話を大切にしているため、来訪者は店主や店員と気軽に会話することができます。100年以上にわたって「のれん」を受け継いできた老舗の店主の言葉は含蓄に富み、来訪者にとって印象深い思い出になることでしょう。



品川宿の様子を描いた歌川広重（初代）の浮世絵「東海道五拾三次之内 品川日之出」

三河屋（P.24に掲載）の山田和美さんは自身の経験から、「いまの外国人は『本物』を見に来ている。過度に気を回したもてなしをするのではなく、ありのままを体験してもらうことが正解ではないか」と話しました。これは外国人に限った話ではなく、都市型観光の愛好者たちに向けても同じことがいえます。自分たちと違う環境で暮らす人々の日常に「魅力的な非日常」を感じて楽しむわけですから、「しながわらしさ」のあるまちづくりが求められています。そのような流れの中で、「まちの顔」である顕彰事業所は、区の都市型観光にとって鍵となる存在といえるのです。